

芭蕉の修辭意識

——「おくのほそ道」を中心に——

野地潤家

清瀧や浪にちりなき夏の月

「去来抄」には、芭蕉の右の句について、「先師難波の病床に予を召て曰、頃日園女が方にて、しら菊の目にたてゝ見る塵もなしと作す。過し比ノ句に似たれば、清瀧の句を案じかえたり。初の草稿野明がかたに有べし。取てやぶるべしと也。然どもはや集くにもれ出侍れば、すつるに及ばず。名人の句に心を用ひ給ふ事しらるべし。」(頼原退蔵校訂「去来抄・三冊子・旅寝論」八岩波文庫、一三三六)と伝えている。また、土芳の「三冊子」には、「清瀧や浪

にちり込青松葉」と掲げて、「此はじめは、大井川浪にちりなし夏の月、と有。その女が方にての、白菊のちり、にまぎらはしとて、なしかへられ侍る也。」(同上書、一一九六)とだけ述べているが、去来の「旅寝論」には、この両書よりもさらにくわしく、「清瀧や浪にちりなき夏の月 先師、此句は清たきの初の吟也。先師易寶し給ふ砌、我を呼て曰、此比園女かたにて、白菊の目に立て見るちりもなしと云句を作すれば、清たきの句を吟じかへたり。忘れず書とせめ、野明が方に残し霞草稿を破捨べしとて、清瀧や波にちり込青松葉 先師の句をかたり給ふ。是等はあながち忘るべき程の事は侍らね共、名人の心を用給ふ事見るべし。されば波にちりなきの句は、外

にきたすべき句にも侍らぬを、先師の句といへば、門人あらそひ出して集々に見へ侍る。誠に先師の本意を破るもあさまし。」(同上書、一七八べ)と出ている。(なお、この挿話は、支考の「笈日記」その他にも見えていて、それぞれ小異があるが、今は省略する。)

さて、これによると、芭蕉は、

○清瀧や浪にちりなき夏の月

○白菊の目に立てて見るちりもなし

これら両句のうち、「ちりなき」「ちりもなし」という類似した表現を、「まぎらはし」く感じ、二者択一の結果、「清瀧や波に散り込む青松葉」と推考して、両句を最善に生かしており、そのきびしくこまやかな心づかいに、去来が感じ入っている。芭蕉にしてみれば、「浪にちりなき」は、一応新鮮な表現として愛着を感じていたにちがいないが、園女に与えた句と対照させるとき、やはりそのままに両者を並存させることは、気がかりでできなくなつたらしい。なぜそうなつたかについては、従来、園女への儀礼的顧慮のため、前者を改作したととられ、また、蕉門でよく言われた「等類」回避のためとも考えられているようである。(志田義秀著「芭蕉俳句の解釈と鑑賞」、一九二一—一九八べ)

しかし、たまたま園女への顧慮のみのために、そうなつたでもなければ、またたんに形式的等類化を避けるためにのみ、そうしたというのでもなく、そこには、両者をかねて、芭蕉のきびしい修辭意識が異常な緊張感をもって流れていることを、思わずにはいられないのである。

この挿話は、あまりにも有名であるが、このほかにも、「旅寝

論」には、越人の

月雪や鉢たゞく名は源之丞

という句について、「此句さるみの集の草稿に撰入侍りけるを、いたみの集に、彌平とはしれど哀れや鉢扣」と云句を見あたりて、入集いかゞ侍らんと貌ひけるに、先師はいく、其心ざす所替り有。然共句においてまぎらはし、遠慮有べしと下知し給へり。」(前掲書、一七九べ)と述べており、これによつてみても、芭蕉が形式的等類はいらまでもなく、その上に、句全体の感じや語感における「まぎらはしき」を、問題としていふことがわかる。類似表現や同一表現から生じてくる「まぎらはしき」や平板化を避けるために、芭蕉の言語感覚は、高度に緊張していた。そしてそれは、ある角度からは徹底したものであった。今は、このような観点から、芭蕉の修辭意識を、「おくのほそ道」を中心にして考察したいと思う。

二

「おくのほそ道」には、つぎのような、修辭上の対比例が見いだされる。

1 ○爰に義経の太刀辨慶が笈をとめて什物とす、

○笈も太刀も五月にかざれ帯轡(杉浦正一郎校註「おくのほそ道」△岩波文庫V二二—二三べ)

2 ○船をかりて松嶋にわたる。其間二里餘、雄嶋の磯につく。

同上、三〇べ)

3 ○雄嶋が磯は地つゞきて海に出たる嶋也。(同上、三一べ)

3 ○此所太田の神社に詣。真盛が甲・錦の切あり。(同上、四八べ)

4 ○むかし物がたりにこそかゝる風情は侍れと、やがて尋あひて、その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなどにとたひ立。(同上、五三―五四ハ)

○鶯の関を過て湯尾峠を越れば、燧が城、かへるやまに初鷹を聞て、十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ。(同上、五四ハ)

○露通も此みなとまで出むかひて、みのく国へと伴ふ。(同上、五六ハ)

5 ○山を登り坂を下るに、秋の日既ニ、斜になれば、名ある処々見残して、先後醍醐帝の御陵を拜む。(日本古典文学大系「芭蕉文集」所収「野ざらし紀行」、四〇ハ)

○聖武皇帝の御時に当れり。「ほそ道」前掲、二七ハ)
○あるじに酒すゝめられて、けいの明神に夜参す。仲哀天皇の御廟也。(同上、五四ハ)

6 ○造々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞くと、(同上、四四ハ)

○(前略)蟹の苦ぶきかすかなれば昔の一夜の宿かすものあるまじ」といひをどされて、かゝる国に入。(同上、四七ハ)

○卯の花山・くりからが谷をこえて、金沢は七月中の五日也。(同上、四七ハ)

○大聖持の城外、全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地也。(同上、五一ハ)

7 ○石の蓮台・獅子の座などは、蓮・菡の上に堆ク、双林の枯たる跡も、まのあたりにこそ覚えられけれ。(日本古典文学大系「芭蕉文集」所収、「笈の小文」、五六ハ)

○むかしよりよみ置る石枕、おほく誦任ふといへども、止唐原流て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代変じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を聞す。(前掲「ほそ道」、二七ハ)

○五百年來の佛、今日の前にかびてそとろに珍し。(同上、二九ハ)

○真盛討死の後、木曾義仲願状にそへて此社にこめられ侍るよし、樋口の次郎が使せし事共、まのあたり縁紀にみえたり。(同上、四八ハ)

8 ○社頭神さびて、松の木の間にも月のもり入たる、おまへの白砂霜を敷るがごとし。往昔、遊行二世の上人大願発起の事ありて、みづから草を刈、土石を荷ひ泥濘をかはかせて参詣往來の煩なし。古例今にたえず、神前に真砂を荷ひ給ふ。(同上、五四―五五ハ)

9 ○あるじに酒すゝめられて、けいの明神に夜参す。(同上、五四ハ)

○古例今にたえず、神前に真砂を荷ひ給ふ。「これを遊行の砂持と申侍る」と亭主のかたりける。(同上、五五ハ)

○十五日、亭主の詞にたがはず雨降。(同上、五五ハ)

10 ○かゝる所の穠なりけりとかや。此浦の実は秋をむねとするなるべし。かなしさ、さびしさいはむかたなく、秋なりせば、いさゝか心のはしをもいひ出べき物と思ふぞ、我心匠の拙なきをしらぬに似たり。(日本古典文学大系「芭蕉文集」所

取、「笈の小文」、六四(一)

○江の縦横一里ばかり、梯松嶋にかよひて又異なり。松嶋は笑

ふが如く、象瀉はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえ

て、地勢魂をなやますに似たり。(前掲「ほそ道」、四三

二)

○行くてたふれ伏とも萩の原と書置たり。行ものゝ悲しみ、

残るものゝうらみ、隻鳥のわかれて雲にまよふがごとし。(

同上、五〇(一)

11 ○其無能不才を感じる事は、ふたゝび南花の心を見よとなり。(

日本古典文学大系「芭蕉文集」所取、「養虫説跋」八貞享四

年の作と推定、一四七(一)

○(前略)たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫

く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋

につながる。(同上所取、「幻住庵記」八元禄三年八月作、

一八六(一)「幻住庵ノ賦」

12 ○あら物ぐさの翁や。(冒頭文)……あら物ぐるおしの翁や。

(終末文)(中に、三つの文をばさんでいる。)(同上所

取、「閑居の箴」、一四三(一)(ただし、風徳の「芭蕉文

集」は※が「物ぐさの翁」となっているよし、大系頭注によ

る。)

13 ○つら〜みれば離騒のたくみ有にたり、又蘇新黄奇あり。

(同上所取、「養虫説跋」八貞享四年の作と推定、一四七(一)

○其日は雨降、風より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流

れたりなどいふ事、たれ〜もいふべく覺侍れども、黄奇蘇新
のたぐひにあらざば云事なかれ。(同上所取、「笈の小文」
五三(一))

14 ○ころは高きに遊んで、身は芻蕘雉兔の交をなし、自鋤を荷

て、淵明が園にわけ入、牛を牽ては箕山の隠士を伴ふ。(同

上所取、「竹の奥」八貞享元年の作、一三七(一)

○十二日、平和泉と心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞伝

て、人跡稀に雉兔芻蕘の往かふ道そこともわかず、終に路ふ

みたがえて石の巻といふ漢に出。(前掲「ほそ道」、三二

15 ○熱田に詣ヅ。社頭大イニ破れ、築地はたふれて草村にかく

る。かしこに繩をはりて小社の跡をしるし、爰に石をすえて

其神と名のる。よもぎ・しのぶ心のまゝに生たるぞ、なか

〜に目出度よりも心とまりける。(日本古典文学大系「芭

蕉文集」所取、「野ざらし紀行」、四一(一)(ただし、菊本

本では、A B が入れかわっている。)

○爰にわらちをとぎ、かしこに杖をすて、旅寝ながらに年の

暮ければ、(同上、「野ざらし紀行」、四二(一))

○瀧仏の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに鹿の子を産を見て、此

日におておかしければ、(同上、「笈の小文」、六一(一))

以上の用例(1〜15)において、傍線を施した語を相互に見比べ

てみれば、芭蕉が一語一句の措辞にも、いかにこまかく心くばりを
していたかを知らされる。この措辞彫琢の精密さ、鋭さ、周到さ

は、また従の発句・返句における句作上の苦心と二つではない。

芭蕉は、同一語や類似した言いかたの、平板無味な反復や累加を避けつつ、できるだけ効果深く、変化あらしめ、しかも安定感を与えた表現を企図していたようである。けれども、無味平板な重復を避けようとする原則をつらぬこうとして、かえって文表現の実感不自然に傷ついたり、無理な形に歪めたりしてしまふようなことは、いつのばあいも、聰明に避けている。それは、上掲の用例をこまかく検討することによつても、肯かれるであらう。

用例14の「芻蕘雉兔」^A、「雉兔芻蕘」^Bにしても、単純な技巧上の入れかえではなく、前者には、「雉兔」よりも「芻蕘」のほうに、「身」に緊密な関連があり、後者には「人跡稀に」という点からも、「芻蕘」よりも「雉兔」を前置するほうがふさわしい点があり、それぞれ、「A・B」、「B・A」の順をえていると考えられる。また、両者の文中における音声相からも、この配置によるのがしげんに文韻律を生かしている。ここにも、芭蕉の緊張した修辭意識が感知される。

また、用例2の「雄嶋の磯」と「雄嶋が磯」にしても、きわめて微妙な点で、「の」と「が」とが使い分けられている。これは、書写の際、「の」「の」とを、筆のすべりから書きわけたとも、一応は考えられるが、「三冊子」に、「能書物かけるには、歌の詞、手爾葉など違ふ事あり。ふしぎに思ふべからず。かなよどのつゞき、時の拍子、又書きま見ぐるしき所、書違へたる事多しと也。」（頼原返蔵校訂「去来抄・三冊子・旅寝論」八岩波文庫V、一四三頁）ともあるが）、くりかえし読んでみると、そういう偶然的な書写上の条件よりも、文の声調の上から、やはり、「の」と「が」と

が、ゆるぎのない安定感をえている。この点からも、「は」と「に」における「松島」の条の修辭の深さを如実にうかがうことができる。

もっとも、芭蕉は、こうした同類異化の表現にのみ、神経を尖鋭にしていたのではない。たとえば、用例1、2、3と関連して、「平泉」の条を見ると、「大門の跡」「秀衡が跡」「和泉が城」「康衡等が旧跡」「衣が関」「夏草や兵どもが夢の跡」（前掲「ほそ道」、三三—三四頁）のように、「が」が頻出している。これらの「が」を、形式的に「の」と、対比させることはしてないのである。（なお、「妙禪師の死関、法雲法師の石室をみるがごとし。」（同上、一七頁）における、「の」「が」の用例にも、用例1、2、3に関連して、芭蕉の微妙なる語意識、語感を認めることができる。）

また、用例10においては、「象瀉」の条の、「寂しさに悲しみをくはえて」と、「笈の小文」の「かなさし、さびしさいはむかたなく」との相互関連を見ることができ、さらには、「小文」から「ほそ道」への、修辭意識と技巧との深まりを認めることができよう。

三

さらに、「おくのほそ道」には、つぎのような用例群が見られる。

- I 1 室の八嶋に詣す。（同上、一一二頁）
- 2 卯月朔日、御山に詣拝す。（同上、一三三頁）
- 3 それより八幡宮に詣。（同上、一六二頁）

4 修驗光明寺と云有。そこにまねかれて行者堂を拜す。夏山に足駄を拜む首途哉。(同上、一六六)

5 薬師堂・天神の御社など拜て、其日はくれぬ。(同上、二六六)

6 早朝塩がまの明神に詣。(同上、二八六)

7 十一日、瑞岩寺に詣。(同上三二六)

8 (兼て耳驚したる二堂開帳す。△同上、三四六)

9 岸をめぐり岩を這て仏閣を拜し、佳景寂莫として心すみ行のみおぼゆ。(同上、三七六)

10 五日、権現に詣。(同上、三九六)

11 (八日、月山にのぼる。△同上、四〇六)

12 (日出でて雲消ゆれば、湯殿に下る。△同上、四〇六)

13 此所太田の神社に詣。(同上、四八六)

14 (左の山際に観音堂あり。△同上、四九六)

15 (大聖持の城外、全昌寺といふ寺にとまる。△同上、五一六)

16 (丸岡天瀧寺の長老、古き因あれば尋ぬ。△同上、五二六)

17 五十丁山に入て永平寺を礼す。道元禪師の御寺也。(同上、五二六)

18 あるじに酒すゝめられて、けいの明神に夜参す。(同上、五四六)

19 (浜はわづかなる海士の小家にて、佗しき法花寺あり。△同上、五五六)

20 旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の迂宮おがまんと、(同上、五六六)

「はそ道」の旅では、歌枕を訪ねることともに、神社・仏閣に参拜し参詣することが多かった。そのばあい、もつともふつうには、「詣づ」(用例3、6、7、10、13)という語を用いている。そのほかには、「詣す」(用例1)、「詣拜す」(用例2)、「拜す」(用例4)、「拜む」(連体形、用例4)「拜みて」(用例5)、「開帳す」(用例8)、「拜し」(用例9)、「礼す」(用例17)、「夜参す」(用例18)、「おがまん」(用例20)などが用いられている。別に、参詣・参拜のことをいふ動詞を用いていないもの(用例11、12、14、15、16、19)などもある。いずれにしても、「詣づ」という、しぜんでなめらかな感じをとまなり語を主調としながら、それにさまざまなくふうを凝らし、単調化、重復感をふせいで、変化を加え、それぞれの文、文章の内容・格調に的確に合致させている点は、見のがせない。

芭蕉の修辞意識は、語本来の語感を文脈にいっぱいにはたらかせながら、その異出や頻出に際しては、たえず飽和をきらい、「まぎらはしさ」を避け、文脈の新鮮さ、語の生命感を保つことに注がれている。

Ⅰ 1月の輪のわたしを越て、瀬の上と云宿に出づ。(同上、二二六)

2 猶夜の余波心すゝまず、馬かりて桑折の駅に出る。(同上、二二六)

3 (前略) 終に路ふみたがえて石の巻といふ漢に出。(同上、三二六)

4 「(前略) 神明の加護かならず恙なかるべし」と云捨て

出づ、哀さしばらくやまざりけらし。(同上、四六六)

5 黒部四十八か瀬とかや、数しらぬ川をわたりて那古と云浦に

出。(同上、四六六)

6 (福井は三里計なれば、夕飯したゝめて出るに、たそかれの

路たどくし。(同上、五三三)

7 (前略) 名月はつるがのみなとにとたび立。等載も共に

送らんと、裾おかしうからげて路の枝折とうかれ立。(同上、

上、五四六)

これらの用例においては、まず、2に注目される。ここでは、「出る」という連体形終止が当時の文章にしばしば見えるという点

からの、語法の上からの認容とならんで、この用例2が、他の用例

1、3、5に対してもっている、作者の修辭的自覚を問題とする必

要がある。一つには、慣用的に、一つには、文勢上、2において、

「出る」の形がとられたというだけでなく、この語がもつ文脈上の

安定感、弾力性にとむ芭蕉の修辭意識によって、用例1、3、5、

7などと対応して、その効果を取めているのである。

Ⅲ 松葉や風濤が伊勢に有けるを尋音信て、十日ばかり足を

とむ。(日本古典文学大系「芭蕉文集」所収、「野ざらし

紀行」三七六)

○大和国に行脚して、葛下の郡竹の内と云所にいたる。此処は

れのちりが旧里なれば、日比とままりて足を休む。(同上、

上、三八六) (菊本本には、それぞれ異同がある。)

ここにも、芭蕉の修辭意識の一つが見られる。貞享初期に、この

四

なお、「ほそ道」には、つぎのような用例群が見られる。

I 1 堅横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付侍り、といつぞや聞え給ふ。(前掲「

ほそ道」、一六六)

2 木塚も庵はやぶらず夏木立

ととりあへぬ一句を柱に残侍し。(同上、一七六)

3 「武隈の松みせ申せ遅桜」

と拳白と云もの、餞別したりければ、(同上、二五六)

4 行くてたふれ伏とも萩の原

と書置たり。(同上、五〇六)

5 曾良も前の夜、此寺に泊て、

終宵秋風聞やうらの山

と残す。(同上、五一六)

6 折節庭中の柳散れば

庭掃て出ばや寺に散柳

□ととりあへぬさまして草鞋ながら書捨つ。(同上、五一六)

「ほそ道」には、発句が六三句採録されているが、それらのうち、

発句を受ける「と」は、わずかに四例しかない。そのうち、用

例2は「ととりあへぬ……」となっており、6は、「□ととりあへぬ

さまして……」とだけあって、「と」が入っていない。これは、

このばあい、「と」で受けなくてもすむように、「折節庭中の柳散

れば、」が詞書ふうにおかれていることにもよろう。また、用例2

ここに「と」が入ると、「草鞋ながら書捨つ。」という、この文みずからのつ、あたふたとした感じが消えてしまふであらう。

Ⅰ 瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すがらにと出立侍を、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨筆のたぐひ、

あるはさがりたき銭などしたるは、さすがに打捨がたくて路次の煩となれるこそわりなけれ。(同上、一一六)

2代々あるは伐り、あるひは植継などせしと聞ゆ、今将千歳のかたちとよのはひて、めでたき松のけしきになん侍し。(同上、二五六)

Ⅱ 1 (前略) 火も出見のみこと生れ給ひしより室の入嶋と申。

又煙を詠習し侍もこの謂也。将このしろといふ魚を禁ず縁(起) 託の旨世に伝ふ事も侍し。(同上、一二六)

2 雲居禪師の別室の跡、坐禅石など有。将、松の木陰に世をいとふ人も稀く見え侍りて、落穂・松笠など打けぶりたる草の庵閑に住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海にうつりて風のをがめ又あらたむ。(同上、三一六)

右の、Ⅱの2における

2あるは——あるひは

Ⅱにおける、

1又——将

2将——又

の対置には、芭蕉の緊張した修辞意識を見ることができ。こと

に、Ⅱの2、「松島」の条「将——又」は、巧緻をきわめた措辞といえよう。「又——将」とは、逆置できないほどに、この長文を緊

密ならしめている。「松島」の条において、この文の「将——又」が定着するまでには、おそらく相当の推考過程をへたであらうが、その推考過程において、芭蕉の修辞意識は、「将——又」を、用例1の「又——将」に對比して、いっそうゆるぎのないものとしているのである。

五

同一語や類似した言いかたの重出、頻出、または、対比、対置に關し、芭蕉は鋭い修辞意識を示した。しかし、同一語や同一表現の累出や頻出を、芭蕉は頭から拒否したのではない。それどころか、対句表現をはじめとして、同一表現や類似表現の頻出や累加によって、かえって表現効果を高める方法も、芭蕉としては、もちろん手中のものであった。

それでは、そういう点をじゅうぶん認めるとして、つぎのような例は、どう考えるべきであらうか。

1 旧友に奈良にてわかる。

鹿の角先一節のわかれかな

大坂にてある人のもとにて、

杜若語るも旅のひとつ哉 (日本古典文学大系「芭蕉文集」所収、「笈の小文」、六二六)

2 ながさめかねしと云けむも理りしられて、そとろにかなしきに何ゆへにか老たる人をすてたらむとおもふに、いとと涙落そひければ、

佛は姨ひとりなく月の友 ばせを (同上所収、「更科姨捨月之辨」八貞享五年秋作V、一五八一—一五九六)

3又、清水ながるゝの柳は芦野の里にありて田の畔に残る。此所の郡守戸部某の此柳みせばやなど折くへの給ひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日此柳のかけにこそ立より侍つれ。(前掲「ほそ道」、一八六)

4鐘摺・白石の城を過、笠嶋の郡に入れば、藤中将東方の塚はいづのくほどならんと人にとへば、是より遙右に見ゆる山際の里をみのわ・笠嶋と云、道祖神の社、かた見の薄今にありと教ゆ。(同上、二四六)

これら一群の用例については、読む人によって、受けとりかたがちがひ、したがって好悪の情もことなるであらう。用例1の「にて」、2の「に」、3の「を」、4の「ば」の累出の感じは、対置や反復にきびしい修辭意識を見せた芭蕉としては、例外のようにも思われる。ここでは、ふつうの対句的表現のもつような効果はもらえないし、むしろその効果を弱めているかに思える。しかし、また、芭蕉の語句の断続意識、間の置きかたにおける個癖をも考慮に入れる必要があらう。そうみれば、この四例にも、どこか共通した、芭蕉特有の息づかいがこもっているようにも思われる。

したがって、これらのばあいは、ある特定の語の累出のみをとりあげるのではなく、さらに別の視点をもとらなくてはならない。1に關しては、その詞書の性格と、「笈の小文」当時の芭蕉の、散文推考意識が問題にされなくてはならず、2に關しては、「詞書としての性格のほか、抒情的な表現における強調法の問題がとりあげられよう。また、用例4、5については、たとえば、

○陸奥へまかりける野中に、目になつ様なる塚の侍りけるを問はせ侍りければ、「これなん中將の墓と申す」と答へければ、「中

将とはいづれの人ぞ」と問ひ侍りければ、「実方親臣のこと」となむ申しけるに、冬の事にて、霜枯の薄ほのほの見えわたりて、折ふし物悲しく寛え侍りければよめる 西行法師

朽ちもせぬその名ばかりをとどめ置きて枯野の薄形見にぞ見る
〔「新古今」〕哀傷歌、佐々木信綱校「新古今和歌集」八岩
波文庫、一三二六

という文章の存在を考慮してみる必要があらう。芭蕉の表現契機としての、西行の存在は軽視することができないのである。そのことは、用例4についても、いえることである。

六

芭蕉の文章観の一端は、「去来抄」に、つぎのように伝えられている。

「先師曰、世上の俳諧の文章を見るに、或は漢文を仮名に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入し、辞あらく賤しく云なし、或は人情を云とても今日のさかしきくまぐを探り求め、西鶴が浅聞しく下れる姿有。再徒の文章は體かに、作意を立、文字はたとひ漢字をかるとも、なだらかに云ひつゞけ、事は鄙俗の上に及ぶとも、懐しくいゝとるべしとなり。」(前掲「去来抄・三冊子・旅談論」、五八―五九六)

この文章観は、芭蕉自身によって、「おくのはそ道」を中心とする、諸種の文章に、的確に具現されている。その意味で、いっそう感深いものがある。「作意たしかに」「なだらかに」「なつかしく」という、俳諧文章への心構から、芭蕉のきびしい修辭意識も生まれてきたのである。

凡兆に論しては、「一句わづかに十七字也。一字もおろそかに思ふべからず。俳諧も流石に和歌の一体也。一句にしほりの有様に作すべしと也。」(同上、六六べ)と述べている。また、「三冊子」には、「一卷の内似たる句嫌之なり。是遠輪廻也。等類の事おろそかにすべからず。師のいはく、他の句より先我が句、等類する事をしらぬもの也。よく思ひ別て味べし。若、わが句に障る他の句ある時は、必わが句を引べし。」(同上、九〇べ)と述べている。発句にせよ、連句にせよ、一字をおろそかにせず、「まぎらはしさ」を避けて、作意たしかに、個性味ある斬新な表現を生みだすことは、芭蕉のつねに実践し、かつ、教えてやまないところであった。その芭蕉に、上乗ってきたような、鋭くきびしい修辭意識が流れていることは、まことにしぜんのごとであり、当然のごとである。

「おくのはそ道」は、元祿二年九月に旅をおえて、元祿七年初夏、素龍が清書しおわるまで、五年もの歳月がすぎている。その間の芭蕉の執筆状況ならびに推考作用について、いまその過程と奥態とを全面にわたってつまびらかにすることはできない。ただ、完成された「ほそ道」本文に徴しても、その推考彫琢の入念さと精密さとは、じゅうぶんに推察し感知し認定しうるものである。本稿では、それがどう具現しているかについて、その修辭意識を中心に考察を加えたしだいである。芭蕉が独自の俳文を創始しえたのも、こうしなきびしい修辭意識が、その句・文両面を支えていたことによると考えられるのである。(昭和24年11月26日初稿、昭和25年11月18日口頭発表、昭和26年5月7日補稿)

—— 広島大学助教授 ——